様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 8 日現在

機関番号：32621
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520326
研究課題名（和文）パリという首都風景の誕生
−フランス大革命から世界恐慌まで−
研究課題名（英文）The birth of Paris, landscape of the capital.
From the French Revolution to the Great Depression.
研究代表者
澤田肇（SAWADA HAJIME）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：60235471

研究成果の概要（和文）：
パリがどのようにフランスの、そしてヨーロッパの首都としての外観と機能とイメージを形成していったのかを多角的に問うことが、本研究の目的である。シンポジウムや研究会における発表と議論の過程で、自らにふさわしいイメージを自己増殖していくかのような都市風景を構築するパリのダイナミズムが、複数の異なる専門分野からのアプローチを組み合わせることで一層浮き彫りになることを確認できた。

研究成果の概要（英文）：
The purpose of our research is to know under multiple angles how Paris formed the outside aspect, the functions and the image which suit in the capital of France and Europe. Through colloquiums and meetings of studies, thanks to the crossing of the methods of coming research for different disciplines, we were able to notice that Paris possesses a dynamism which transforms the townscape, by multiplying the images appropriate to itself.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
総　計	2,600,000	780,000	3,380,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）
キーワード：仏文学

１．研究開始当初の背景

絶えずさまざまな言説やイメージの対象となる都市がある。パリについても考察される問題は、オースマンのパリ大改造を材料とする建築や都市計画から、ヴェルサイユからパリへの権力の中心の移行にともなう文化の継続と断絶まで幅広い。それらの研究はそれ自体興味深くとも、パリが他の都市とは何が異なり、なぜ今日あるような姿になったのかを十分に伝えることはできない。もちろん広い視野からのパリに関する研究はこれまでもあった。アメリカの研究者ドナルド・J・

オールセンは、その著作『芸術作品としての都市　ロンドン/パリ/ウィーン』においてこのヨーロッパの三大都市は芸術的記念碑性が求められ続けた特異性を明らかにした。日本では、高階秀爾と芳賀徹が主導したセミナーの成果として『世界都市の条件』を刊行し、人類の夢が託される場としてのごく少数の世界都市のあり方を問うた。この二点は示唆に富み、大いに参考となる研究書であるが、近代ヨーロッパの首都であるパリの本質の一部しか伝えていないとわれわれは考える。

一例を挙げると、研究代表者は以前の研究「フランス 19 世紀挿絵本データベース作成と語彙統計学的研究　−バルザックと「パリ神話」に関する時代背景の探究とその Web 公開−」（科学研究費補助金基盤研究（C）平成 15−16 年度）において、19 世紀の首都となるパリの神話を創造した作家であるバルザックの作品の中のパリが受け入れられる素地を作ったのは、イリュストレ・ロマンチックと呼ばれる 1820 年代後半から流行した木口木版による挿絵入りでパリ風俗物に属する書物であることを問題とした。それ以後の研究においては、19 世紀前半には、バルザックの小説はあるがままのパリとあるべきパリの姿を、そして大衆向けの図書は一般人が期待するパリの姿を読者に提示していたという並立関係が持続していたことを意識するようになった。

巨視的な検討と微視的な考察に加えて、相互関係の把握が求められる。そのためのキーワードが「首都風景」である。パリという首都がいかに成り立ってきたのか、その本質を知るためには、風景という言葉で結ばれるネットワークのなかでさまざまな現象や事象を検討することが必要であろう。その首都の風景を生み出しているのが、官界、産業界、文芸界の人間たちが作り出す〈欲望のトライアングル〉である。われわれは、この三角地帯の内実と相互関係の複合性を明示することを目指す。

２．研究の目的

パリがどのようにフランスの、そしてヨーロッパの首都としての外観と機能とイメージを形成していったのかを多角的に問うことが、本研究の目的である。パリという近代ヨーロッパを代表する首都の風景は、フランス大革命の始まりから世界大恐慌の時期までというおよそ一世紀半（1789ー1933 年）の間に、形成され確立したと見なしてよい。ナポレオンを始めとして政治家たちは見せるものとしてのパリを、商人たちは売り物になるパリを、作家たちは作品に欠かせない材料としてのパリを語った。だがその物語を作るのは、一人の権力者だけでもなければ、何人かの有名な画家だけでもない。今日の姿をもつパリとは、かくある（べき）首都を作らせたい−作りたい、見せたい−見たい、売りたい−買いたいと思う人間たちのうちにある、さまざまに錯綜する意図の波と無意識の流れが渦を巻く場から生まれた、とわれわれは考える。その場を本研究においては、＜首都風景を生む欲望のトライアングル＞と名付ける。

この場を探索するには、異なる分野の専門家が協同して研究を進めるべきであろう。本研究においては、それぞれに柔軟な思考力と独自の観点を持つ、建築学・経済学・美学・比較文学・フランス文学の研究者の間で計画を推進する運びとなった。パリの成立について多角的に問うことは、フランス文学界自体にとって格段と深化した文学と都市の研究を得られることになる。これまでにはない成果が見込まれるのは、他分野の学界にとっても同様のことであろう。ただし何よりもパリをめぐる大量の言説が流布していることか

ら、幅広く言葉と思想を扱うフランス文学の部門で本研究を推進することがもっとも理にかなうと考える。

３．研究の方法

建築学・経済学・美学・比較文学・フランス文学という異なる分野の専門家が協力して進める計画として、調査と研究が有効に機能し、成果が具体的に得られるよう、次の活動内容に従って共同研究を推進する。

（1）首都風景の誕生を＜欲望のトライアングル＞の視点から明らかにする資料の検分と収集を主たる目的とする海外学術調査

（2）海外学術調査により得られた資料を活用した、あるいは領域横断的な観点からの考察をもとにした発表と討議のための研究会（他の外部の専門家の参加もある）の挙行

（3）論文集刊行を前提にした「パリという首都風景の誕生」における諸要素の特異性と関連性の全体像を展望できるシンポジウムの開催

４．研究成果

3 年間にわたり、研究参加者は各人が資料の検討を行い、順番に海外調査に赴くことを遂行した。この期間に得られた研究の成果は、関心を持つ人々に広く知ってもらうためにシンポジウムあるいは研究会という形で公開した。

1 年目は、2011 年 1 月 29 日（土）の午後 3 時から 7 時まで上智大学においてシンポジウムを開催した。シンポジウムの名称は、研究課題名「パリという首都風景の誕生　―フランス大革命から世界大恐慌まで―」そのものである。研究発表の題目は、ゲストスピーカーによるものを含め、以下のとおりである。ゲストスピーカーについては所属を括弧内に記す。

1）澤田肇「ナポレオン帝政・王政復古・七月王政下の首都改造　―『人間喜劇』に見るパリの変貌―」

2）栗田啓子「地上の世界、地下の世界　―19 世紀パリの上下水道整備と土木エンジニア―」

3）北山研二「変容するパリの記憶・風景　―写真的次元で―」

4）三宅理一「ガラスのつくった新たな都市景観」（藤女子大学人間生活学部教授）

5）南明日香「世紀末の彫刻狂(スタテュオマニ)　―パリの彫像ブーム―」

6）五十嵐太郎「パリの街並みをスキャンする」

2 年目は、2011 年 10 月 15 日（土）の午後 2 時から 7 時まで日仏会館においてシンポジウムを開催した。シンポジウムの名称は、研究課題名から「パリという首都風景の誕生―フランス大革命から世界大恐慌まで―第 2 回シンポジウム」とした。研究発表の題目は、ゲストスピーカーによるものを含め、以下のとおりである。

1）北山研二「そぞろ歩きの首都風景パリ　―通り、公園を巡って―」

2）南明日香「日本人作家と墓地　―これもまた、巴里―」

3）栗田啓子「パリ万博と労働者住宅」

4）土居義岳「パリの宗教建築　―首都空間の聖性―」（九州大学芸術工学研究院教授）

5）澤田肇「オペラ座が作るパリの心象風景―建築・演目・幻影―」

研究成果の報告を公開シンポジウムという形で実現したことは、発表者の間ばかりではなく会場とも行われた質疑応答を通して複眼的思考を共有できたばかりでなく、新たな知見を広める出発点ができた。この 2 回のシンポジウムは、ホームページ上で動画の形で閲覧できるようにした。

3 年目は、それまでの 2 年間の調査研究では十分にカバーできなかった領域あるいは時代について検討するため、ゲストスピーカーによる発表を含む、2 回の研究会を開催した。開催日時と発表題目は、以下のとおりである。

第1回研究会　2012年7月14日（土）

「エミール・ゾラとパリの創出」小倉孝誠（慶應義塾大学文学部教授）

第2回研究会　2012年11月17日（土）

「監獄改革と首都改造」梅澤礼（日本学術振興会特別研究員）

「絵画の中のパリ　印象派から後期印象派へ」林道郎（上智大学国際教養学部教授）
文学におけるパリについては、2010年に開催したシンポジウムにおいて、澤田がバルザックの中のパリを検討した。2012年の研究会で、小倉はゾラの中の19世紀後半のパリを分析した。この二人の作品を対照することにより、両作家が国内外においてパリ観の形成に決定的な働きをしたことが明らかになった。都市の環境整備に関する思想は分野を超えて普及し新たな景観を生むことを、梅澤は当時最新の刑務所という司法と建築の交わる場を例に論証した。林は、パリのイメージの普及が印象派と後期印象派の絵画作品によって、質と量の両面においてそれまでとは異なる新たな次元を迎えたと解説した。
議論の過程で、自らにふさわしいイメージを自己増殖していくかのような都市風景を構築するパリのダイナミズムが、複数の異なる専門分野からのアプローチを組み合わせることで一層浮き彫りになることを確認できたことは大きな成果であった。
以上の結果を踏まえて、パリという「首都風景の誕生」における諸要素の特異性と関連性の全体像を展望できる論文集の刊行に向けた準備に取りかかることが研究期間内に達成できた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 4 件）
①南明日香、描写が再生する日本の風土、国際日本文学研究集会会議録、査読有、第 36 号、2013、pp.145-157.
②栗田啓子、ベル・エポックにおける「社会経済」−パリとナンシィを歩く、中央評論、中央大学、査読無、第 282 号、2013、pp.26-35.
③南明日香、« Les villes vécues et décrites par l'écrivain NAGAI Kafû »、*Croisements*、査読有、N°2、2012、pp.201-222.
④北山研二、風景の虚構化または虚構の風景化　—自然風景画と都市風景画について、ヨーロッパ文化研究、成城大学文学研究科、査読無、第 31 集、2012、pp.98-134.

〔学会発表〕（計 3 件）
①南明日香、« Le rêve et la réalité de la ville en transition »、Université d'automne des Pays d'Asie du Nord-Est UNIFA 2（招待講演）, 2012年9月18日杭州師範学校（中国）
②南明日香、パリの街路はどのように描かれたか —荷風、生馬、百合子など、相模女子大学国文研究会、2011 年 7 月 30 日、相模女子大学
③澤田肇、« Le fantastique est-il l'apanage du romantisme ? —Balzac et ses peintres contemporains— »、Colloque international, organisé par l'Association coréenne des études françaises（招待講演）、2011 年 6 月 11 日、梨花女子大学校（韓国ソウル）

〔図書〕（計 4 件）
①澤田肇、フランス・オペラの魅惑　舞台芸術論のための覚え書き、上智大学出版、2013, 268.
②栗田啓子、他、ミネルヴァ書房、古典から読み解く経済思想史、2012、312.
③南明日香、王国社、ル・コルビュジエは生きている　保存、再生そして世界遺産へ、2011、203.
④澤田肇、他、水声社、危機のなかの文学 —— 今、なぜ、文学か？ 2010、274.

〔その他〕
ホームページ等
シンポジウム「パリという首都風景の誕生～フランス大革命から世界大恐慌まで～」
http://www.erp.sophia.ac.jp/Projects/ocw/lecture/lecture/110129lecture/110129lecture.html
シンポジウム「パリという首都風景の誕生～フランス大革命から世界大恐慌まで～」第2回
http://www.erp.sophia.ac.jp/Projects/ocw/lecture/lecture/111015lecture/111015lecture.html

６．研究組織
(1)研究代表者
澤田　肇（SAWADA HAJIME）
上智大学・文学部・教授
研究者番号：60235471

(2)研究分担者

五十嵐　太郎（IGARASHI TARO）
東北大学・工学研究科・教授
研究者番号：40350988
北山　研二（KITAYAMA KENJI）
成城大学・文芸学部・教授
研究者番号：90143130
栗田　啓子（KURITA KEIKO）
東京女子大学・現代教学部・教授
研究者番号：80170083
南　明日香（MINAMI ASUKA）
相模女子大学・学芸学部・教授
研究者番号：20329212